
たびかぜとたんぽぽ

七浦彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たびかぜとたんぽぽ

【Zコード】

N5142A

【作者名】

七浦彩

【あらすじ】

たんぽぼと出合つたたびかぜ。彼は世界を旅しながらたんぽぼと仲良くなつていいく。

たびかぜは今日も色々な土地の上をわたってこめます。

「ああ、なんできれいな色をしたみずみみなんだらつー。あやこで水浴びをしたらさわかし気持ちがいいだらうなー。ぴこー、ぴ、ぴーーー！」

たびかぜはまことにかわかこじゅうを回つておつまました。やのたびにあたらしこでせーとをみつけたは、お田わせやお田わせやお星をまに報せたのでした。

「お田わせ、お田わせ。すこし光を弱くしてはせむりやませんか、ほら、あやこ」の池。せつかくかえるの子が生まれたのに、干上がりてしまこまく

「む。そりが。では雲にかげを作つてもいいわ」

「ありがとう、じあこまく」

やつやつてたびかぜはみんなをせつて遊びこまました。

おぬ田のじとです。

雪をせこでいたたびかぜは、お田わせの光がこつやつ強くなつたのを感じました。

（ああ、やつすぐ春になるんだ）

たびかぜはうれしくなつて、そしてちよひとひびくくなつて、きれいな雪のじなをぱりぱりとまきました。そこた雪はびんびんとなました。

「雪やん、やつお別れだね」

「ええもひ、けれどあなたといられて楽しかつたですよ」

あらがとへ、とつぶやこて雪のせこーのひとつぶがとけました。また会いましょう、とつぶやこて、たびかぜはやこーの欄が落ちた場所を見ました。

やこには、小さな黄色の花がありました。たんぽぽです。たんぽぽはとけた雪のつぶのせこで、ぴかぴかとぬれていきました。

(雪ちゃんが、あのたんぽぽの新しここの方になつたんだ)

たびかぜは少しばかり悲しくなり、そしてうれしくなつて、そ
のたんぽぽに話しかけました。

「こんなにちは、たんぽぽさん。もう花が咲きましたか」
たびかぜに初めて話しかけられたたんぽぽは少しおどろいて、は
ずかしそうにうつむきました。

「もうすぐ春ですね。ほり、お田わまが雲を取ってくれた。雪ちゃん
がとけ、おいしい水になつてくれますよ」

たんぽぽはやはりはずかしそうにうなずくだけでした。

「ではまた、きれいなお花を咲かせてくださいね」

しかたなく、たびかぜはこいつたんぽぽからせなれる」とこじまし
た。

それからお田わまとお田わまが何回か交代しました。たびかぜは
たんぽぽのことが気になつてこました。

「ここにまづく、今日はさむいですね。」ここにちは、今日せ少し急ぐ
ので早めに行きますがゆるしていくださこね。やのひかにたんぽぽも
笑ってくれるようになつました。

たびかぜはたんぽぽのことが好きになりました。たんぽぽも、き
つとそうだったにちがいありません。

たびかぜがほうこくする」とせ、こつしかたんぽぽの「じばかり
になつてしましました。お田わまとお田わまもお囁きまわ、苦笑い
してそれを聞いていました。

やうして、どれくらいたつたのでしょう。

お田わまはこいつもようすいぶんとあたたかく世界をひらいていま
した。

「こんなにちは、たんぽぽさん」

くんじがありません。枯しきつた声が聞こえました。

「かぜちゃん、かぜさん。ああ、そろそろお別れみたいで
す」

「どうしてですか」

たびかぜはびっくりして走るのをやめました。

「わたしのナビもがたびだつ時が来たよつです。わたしは見送らなければ」

「あなたはだじうなんですか」

「わたしま、もう何年もここにこまつた。けれど、もつ根が弱くなつてしまつました。今年で終わりです。よくじてくれてあつがといへかぜさん」

たびかぜはたんぽぽの「じばを信じませんでした。

「いいえうそです。またあなたに会えます」

「ほんとうです。ああ、お田さまがあんなこきらめきつて。とてもあつくてかないません」

それを聞いたたびかぜは、まつわわお田さまのところへ行きました。

「お田さま、お田さま。少し光を弱めてください。たんぽぽが死んでしまいます」

お田さまはその願いを聞きませんでした。

「お前は自分のじいとをわすれていはいなか。お前のじいとはたんぽぽの子どもたちをたびに出してやる」とだらり

そうです、お田さまはたびかぜがたんぽぽばかり気にかけてじいとをまるでしていなこのに怒つていたのです。たんぽぽもそれを知つていました。

お田さまはまたかつかと光をはなち始めました。

たびかぜは雲のところへ行きました。

「雲さん、雲さん。お願ひです。あのたんぽぽをやつてやつてはくださいませんか」

「いいえそれはできません。わたしは今あのかえりの子たちをやつしてこるのです。池がひあがらないよつ」

「では、風を降らしてください」

「できません」

雲もまた、お田さまのめいれいでたびかぜのまつわわといせかかないみつて、と言わっていたのです。

だれに助けを求めて、どうにもなりませんでした。雪がとけてたんぽぽのいのちとなつたように、たんぽぽが子どもを送り出すことはしかたないことでした。

たびかぜはふらふらとたんぽぽのもとへもどってきました。たんぽぽはもひ、まつしろな子どもたちに囲まれていました。

「さよならです。かぜさん。わたしの子どもをつれていつてください」

「できません。あなたとお別れしたくありません」

「お願いです」

たんぽぽのお願いを、きかないわけにはいきませんでした。たびかぜはしかたなく、はい、と答えました。

「では、約束してください。あなたの子どもをせんじんせんじんだら、また会いにきます。それまで待つてくれますね」

「はい、せつと」

それを聞くと、たびかぜは安心してたんぽぽの子どもたちをそつと丁重にはなびました。

どこへ行こうか、わたしあ花の王女さまになりたいわ、ぼくはさばくでもまけない強い花になるんだ。たびかぜはそれをやさしく笑つて聞きながら、子どもたちが自分でえらんだ場所へ、一人一人おろしていきました。

そしてせかいじゅうをめぐつた後、たびかぜはたんぽぽのもとへもどつてきました。

たんぽぽは、やわしく笑つて地べたにたおれていきました。とてもとても、うれしそうでした。

「たんぽぽさん」

たんぽぽは答へませんでした。

「約束したじやありませんか」

たびかぜは泣きました。そして、いてもたつてもいられず、「ぼうぼう、びゅるる」と今までにならはやさで走り出しました。みんながひめこをあげました。

「かぜやん、そんなに早く走つたの葉っぱがみんなおひやつよ。」

「かぜやん、わたしのえだが折れてしまします、お願ひですからー。」

たびかぜは聞きませんでした。たんぽぽがいなくなつた悲しみでも、何がなんだかわからなくなつていたのです。

ふと、かぼそい声が聞こえました。

「こわいよ、お母さん」

それはあのたんぽぽの子守りでした。

よく耳をすませると、聞き覚えのある声が、あわいから、こわいよ、わむいよ、と泣いています。

(たんぽぽさんの子どもを死なせはならない)

ゆづやくたびかぜは走るのをやめました。みんながほつとしましました。

たびかぜはお田をまからもお田をまからも怒られました。たびかぜはだまつて聞いていました。

そうしてまた、もとのじぐとにむづつました。さびしくなんかありませんでした。

「やあ、どうだいさばくは」

「かぜやん、こんにちは。あつこけれどぼくがんばるよ」

「やあ、もう少しだ花が咲くね」

「ええ、こつとうきれいな花を咲かせるわ!」

たんぽぽの子どもたちを見守るのが、もう一つのおじぐとになつたからです。

そうしてたびかぜは、今日も世界中をまわっています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5142a/>

たびかぜとたんぽぽ

2010年10月8日15時09分発行